

岷江入楚と歌学

——「物語之心詞用和歌作例」と「取物語之詞詠和歌例」——

小 高 道 子

藤原俊成が六百番歌合の判詞で「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」と記したことから、源氏物語が歌人にとって必読書とされた。俊成の歌学を継承した二条流の歌学者は、詠歌のために源氏物語を学んだ。岷江入楚は中院通勝が、和歌の師である細川幽齋が果たせなかった「古来の註釈を一覧のためにしあつむへきくはたて」について、「心さしの趣をはたしとくへきよししきりにゆつり命せら」れて著した書である。幽齋が源氏物語を学んだのも「敷島のみちをつたへて筑波の跡をたつぬるおもひふかきゆへ」すなわち和歌・連歌への思いが深かったためであり、通勝は、そのころざしを「ゆつり命せら」れて岷江入楚を記したという。通勝の自序には、次のように記されている。

彼老人敷島のみちをつたへて筑波の跡をたつぬるおもひふかきゆへに此物語をもてあそふ心もねんころ也 しかるにあまたの抄出

をたつさふることそのわつらひあれは古来の註釈を一覧のためにしるしあつむへきくはたてありといへともつゝにそのいとまをうることなし こゝに与謝の海のあまのしわざもなすことなくていたつらに月日を、くる客あり かの心さしの趣をはたしとくへきよししきりにゆつり命せらる

こうした経緯で記された岷江入楚には、三条西家において継承された歌学についての記述がしばしばみられる⁽¹⁾。岷江入楚は、その巻頭に「物語之心詞用和歌作例」と「取物語之詞詠和歌例」とを記す。源氏物語をもとに詠まれた和歌の作例を示すことにより、詠歌指導をしたのである。本稿では、これらの記述を検討する事により、岷江入楚に見られる歌学について、検討を加えたい。

一 物語之心詞用和歌作例

岷江入楚は「物語之心詞用和歌作例」「物語之心詞用和歌作例」として次のように記す。

中古の先達の中に此物語の心をは哥には詠すへからず詞をとるはくるしからすと云一義あれとも心をととりたる哥撰集にあまたみゆ「此物語の心をは哥には詠すへからず詞をとるはくるしからす」というのは「後鳥羽院御口伝」の次のことばを想定しているのであろう。

源氏物語の歌の心をはとらず詞をとるは苦しからずと申しき。すべて物語の歌の心をは百首の歌にもとらぬ事なれども、近代はその沙汰にも及ばず。

このことばについては、伊井春樹氏は次のように整理された。⁽²⁾

(一)の『御口伝』では「物語の歌の心をはとらず詞をとる」とするが、この「詞」は、文脈からいって「歌の詞」と解さなければならぬ。ところが次の『愚問賢注』になると、『御口伝』の説として紹介しながらも「歌よりは詞をとる」と、歌に対する地の文の詞を用いるとし、さらに「物語の歌の心」ではなく、「物語のころ詠まないとする。頓阿は『御口伝』の説を明らかに受けながらも、微妙なことばの解釈の誤伝から、本質的な考えの違いへと発展している。頓阿自身の誤りというのではなく、後鳥羽院の記述から『愚問賢注』の成立するにいたる百十数年の間、『御口伝』の説が本文とは別に人々に流伝していく過程で変形してしまったのではないだろうか。

「物語之心詞用」について、岷江入楚は源氏物語の心を詠んだ十一首の「作例」を載せる事により、検証している。中でも、十一首あげたうち最初の二首については、和歌のもとになった源氏物語の本文を引いて、その「心」であると記している。そしてさらに、八首目の後に「これらは皆心をとれる哥也」と記し、次に「詞をとる哥」として三首をあげる。そしてこれらの十一首から導き出した結論が「近代源氏物語の心詞連綿和哥にとり用之間不及沙汰事也」すなわち「此物語の心をは哥には詠すへからず詞をとるはくるしからす」という「中古の先達の」「一義」は「沙汰」に及ばず、ということであった。

此外統古今になれよ何とてなくこゑのなといへる類あけてかそふへからす 大かた狭衣物語の尋ぬへき草の原の哥をも猶本哥に用たる哥近代集にあまた入たるにや ひとへに心をとるへからすとも定かたし 且は俊成卿六百番哥合の判詞にも源氏みざる哥よみは遺恨の事也と云々 私云近代源氏物語の心詞連綿和哥にとり用之間不及沙汰事也

また、ここに記された「此物語の心をは哥には詠すへからず詞をとるはくるしからす」という「中古の先達」のことばに対する岷江入楚の考証が、まず証歌をあげて検討し、次に俊成の六百番歌合の判詞を引用していることも注目される。岷江入楚は「六百番哥合の判詞」に記された「草の原」の和歌について「狭衣物語」をあげている。通勝は、源氏物語の講釈を通して歌学を学んでいたと推測される。

それでは、岷江入楚のこの部分では、どのような和歌が「作例」として示されているのだろうか。まず、岷江入楚のこの部分について検討する。はじめに岷江入楚の該当部分を源氏物語古註釈叢刊により引用する。また、和歌には通し番号を付した。

続拾遺集

権中納言俊恵

1 なかめするこゝろのやみもはるはかりかつらのさとにすめる月
かけ

とよめるは松風巻に思ひむせひつるこゝろのやみもはる、や
うなりといへる心ときこえたり

同集

典侍親子朝臣

2 あかさりし袖かとかまふ梅か、におもひなくさむあかつきの空
浮舟君こと花よりもこれに心よせのあるはあかさりし匂ひの

しみにけるにやといへる心也

新古今集

前太政大臣

3 しらつゆのなさをきけることのはやほのくみえし夕かほの
はな

続古今集

太上天皇後嵯峨院

4 袖のかや猶のこるらんたちはなのこしまによせしよはのうき舟
小侍従

5 うちわたす遠かた人にこと、ひて名をしりそめし夕かほのはな

光俊朝臣

6 この比はゆくせの水をせき入て木かけ涼しき中川のやと

鷹司法師

7 あかしかた浪の音にやかよふらんうらより遠のをかの松かせ

新拾遺集

8 山風に瀉のよとみも音たて、村雨そ、くよはそす、しき

これらは皆心をとれる哥也

詞をとる哥

新古今

9 虫のねもななきよあかぬ故郷に猶おもひそ松風そふく 家隆

10 みし夢にやかてまきれぬわかみこそとはる、けふも先かなしけ

れ

11 有明の月のゆくゑをななめてそ野寺のかねは聞へかりける 慈円

次に、これらの和歌のもとになったと推測される源氏物語の本文を
新日本古典文学全集により引用する。

1 狩の御衣にやつれたまへりしだに、世に知らぬ心地せしを、まし
て、さる御心地してひきつくるひたまへる御直衣姿、世になくな
まめかしうまばゆき心地すれば、思ひむせべる心の闇も晴るるや
うなりし。(松風)

2 闇のつま近き紅梅の色も香も変らぬを、春や昔のと、こと花よりも
これに心寄せのあるは、飽かざりし匂ひのしみにけるにや。(手習)

3 心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

(中略)

寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのほの見つる花の夕顔

(夕顔)

4 有明のつき澄みのほりて、水の面も曇りなきに、「これなむ橘の小

島」と申して、御舟しばしさとどめたるを見たまへば、(中略)

年経ともかはらむものか橘の小島のさきに契る心は

女も、めづらしからむ道のやうにおぼえて、

橘の小島の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへ知られぬ(浮舟)

5 切懸だつ物に、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかれるに、

白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉ひらけたる。「をちかた人にも

申す」と独りごちたまふを、御隨身ついゐて、「かの白く咲けるを

なむ、夕顔と申しはべる。」(夕顔)

6 紀伊守にて親しく仕うまつる人の、中川のわたりなる家なむ、こ

のころ水堰き入れて、涼しき蔭にはべる。(帚木)

7 はるかにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦つたひして

(明石)

8 雨すこしうちそそぎ、山風ひやかに吹きたるに、滝のよどもも

まさりて音高う聞こゆ。(若紫)

9 身をかへてひとりかへれる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く

御方、ふる里に見し世の友を恋ひわびてさへづることを誰かわく

らん。(松風)

10 見し夢をあふ夜ありやとなげく間に目さへあはでどころも経にけ

る(帚木)

11 世に知らぬ心地こそすれ有明の月のゆくへを空にまがへて(花宴)

二 岷江入楚本文の注

岷江入楚は「物語之心詞用和歌作例」として十一首をあげるが、この十一首のうち、岷江入楚のそれぞれの巻で、該当する本文の注にこれらの和歌が示されているのは、6と11の二首にとどまる。このうち11は、六百番歌合の判詞を引用して、詳細な注が記されているが、6については「此詞をとりて続古今に光俊朝臣 此ころは行せの水をせき入て水かけ涼しき中川の宿」と記すのみである。11については既に検討を加えたので、ここでは6について検討する。岷江入楚には、源氏物語古注集成の番号により、注が記された項目を示す。

岷江入楚 帚木 597

水せき入てす、しきかけに 此詞をとりて続古今に光俊朝臣 此
ころは行せの水をせき入て水かけ涼しき中川の宿

この作例の指摘は、細流抄・明星抄・孟津抄・紹巴抄には見られない。また、岷江入楚の注には肩付の注記が見られない。肩付の注記がない注について、通勝は「肩付無之分ハ予カ註加也」と記している。すると、帚木59に見られる作例の指摘は、三条西家の講釈において継承された源氏物語の本文についての注ではなく、通勝が補った注であると推定できる。肩付のない注について通勝は「予カ註加」と記しているが、通勝が独自に書き加えたのではなく、その部分の源氏物語講釈では講釈されなかった三条西家の説を、該当する部分に、通勝の判断で書き加えた注も見られることがわかる。岷江入楚は「古来の註釈を一覧のためにしるしあつむへくくはたて」により作成されたというが、本文の注として記し集めたのは、その部分の注として三条西家で注釈されてきた注であり、三条西家において継承された秘説を、その出典と共に記したといえよう。そのため、本文の注以外で継承した師説は、それが三条西家の説であったとしても、通勝自身の判断で該当箇所³⁾に注記し、「予カ註加」として肩付には何も記さなかったと推定される。

源氏物語をもとにした和歌については、『源氏作例秘訣』が翻刻・紹介されている。ここに引用された和歌を同書と比較すると、全十一首のうち、重複するのは3・4・8・11の四首のみである。岷江入楚が詠歌の参考にするために主に勅撰集から引用しているのに対して、同

書に引用される和歌は時代が下がるものが多い。同じ源氏物語をもとにした和歌を集めてはいるが、著述目的は異なっていたのであろう。

三 「取物語之詞詠和歌例」

岷江入楚は、「物語之心詞用和歌作例」に続いて「取物語之詞詠和歌例」をあげる。

春はまたかすむはかりの山のはにあかつきかけて月いつるころ
是はすまの巻にあかつきかけて月いつるころなれはといふを
とれり 猶以勘加ふへし

この定家の和歌が源氏物語の次の文をもとに詠まれていることは、花鳥余情が指摘している。

明日とての暮には、院の御墓拝みたてまつりたまふとて、北山に
参でたまふ。暁かけて月出づるころなれば、まづ入道の宮に参で
たまふ。

そして、岷江入楚は須磨巻の12注で、花鳥余情を引用したうえで、さらに「秘」「私」として注を付す。

花 定家卿此詞をとりてよみ侍る哥 内大臣家の百首に 春は
た、かすみはかりの山のはにあかつきかけて月いつるころ
秘 定家卿哥にそのま、下旬に用たる事かつは式部か高名敷云々
私 暁かけて月いつる比なれはとは先夕やみのほとにしひて藤
つほへ参りて夜ふけて北山へ参り給はんと也

花鳥余情が定家の和歌を指摘するのに対し、岷江入楚は「秘」として、源氏物語の本文がそのまま定家の和歌の下句に用いられたことを「かつは式部か高名歟」と記している。この「秘」として記された注は、細流抄・明星抄・孟津抄にも見られるが、紹巴抄には見られない。紹巴抄は「面白詞也」とした上で、花鳥余情と同じ定家の和歌を指摘する。これらのことから、実隆は、源氏物語のこの部分の詞をそのまま使用して定家が和歌を詠んだことを源氏物語の文章が優れているからだと考え、「式部か高名歟」と評価した。この説は、岷江入楚の他、細流抄・明星抄・孟津抄などにも継承されている。紹巴抄も「式部か高名歟」とは記さないものの、源氏物語の詞について「面白詞也」と記している。公条は、この部分の源氏物語の詞が優れていることを紹巴にも伝えたかと推定される。ところが、休閒抄は、「花」として定家の和歌を指摘するのみであり、源氏物語の詞が優れていることについては言及していない。それゆえ、この部分の紹巴抄は、休閒抄を整理しただけでは記すことができない。この注釈からも、紹巴は公条の講釈を聴いていたと推定される。なお、紹巴抄と休閒抄については、稿を改めて検討したい。

この注から、三条西家において行われた源氏物語研究の一端を窺うことができるであろう。典拠などに詳しい花鳥余情は定家の和歌を指摘している。それに対して「秘」では、定家の和歌にそのまま用いられた文章を記した紫式部を褒めているのである。この記事が細流抄にも見られることから、定家の和歌に用いられたことで紫式部を高く評価するこの注記は、実隆から行われていたと推定される。これは、六

百番歌合の判詞に「紫式部歌よみの程よりも物かく筆は殊勝なり」とあることを想起させる。岷江入楚は、「故人此物語称美事」として俊成・定家の言葉を挙げる。その中に次の定家のことばがみえる。

定家卿云源氏物語は紫式部哥よみの程よりはものかく筆上手也
此物語をみればそ、ろにおもしろく哥もよくよまる、とそ

これらのことから、三条西家の歌学者は、和歌を詠むために源氏物語を学んだと推定される。一方、紹巴抄にはこの注記が見られない。紹巴抄は定家の和歌を引用するのみである。これらの注記は、歌人にとって必須のこととして、源氏物語を学ぶ歌人には継承されたものの、連歌師には伝えられなかったであろう。また、『作例秘訣』はこの定家の和歌をあげていない。岷江入楚にみられる詠歌についての記事は、改めて検討される必要があるだろう。

注

- (1) 岷江入楚に見られる詠歌のための記事については、「詠み方のおしへ」〔中京大学文化科学研究 平27・3〕・「歌よみと源氏物語」〔中京大学文学部紀要 平27・3〕で検討を加えた。
- (2) 『源氏物語註釈史の研究』(昭55 桜楓社)
- (3) 『源氏作例秘訣』(平22 青簡舎)